

第二期 第八十六号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2023. 09. 10 定有堂書店 発行

一を始める

読書の福音

「地球沸騰の時代」の夏休み日記

ただ、一度きり

まだまだ日記

本を作る側から (6)

汽水のほとりから (30)

人民食堂の夜 (中)

気が付けば秋風

鳥取あれこれ その八十五

八代日記 (四十一)

理想と現実の狭間から

トレース (コーヒーゼリー2)

期待のニューフェイス

…… 編集後記

奈良 敏行

三砂 慶明

岩田 直樹

木元 健二

鳥居 貴彦

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア



一を始める

奈良 敏行

(定有堂 主人)

『バガヴァッド・ギター』という本がある。ヒンドウ教の聖典とされるものだ。世継ぎ争いの闘いの場面が描かれる。王家の三男アルジュナが戦場に臨んでもなお親族との戦いをためらう。御者のクリシュナ(実は最高神の化身)が叱咤激励する。

《行為をすることだけを考え、行為の結果を考える必要はない。行為の結果を目的としてはならないし、「行為をしない」と考えてもならない。》

要は、戦え戦えというのだ。ここにもオブセッションがあるな、と思った。意識されない欲望の問題だ。

二十代のころ、このオブセッションに振り回された。目的がないのに欲望だけが駆り立てる。

そんなオブセッションと付き合うため、ひたすら書物を読んだ。答えは現実に存在すると思えず、本の中に求めるしかないと感じたからだ。そんなときに読んだ一冊に『正

法眼蔵隨聞記』があつた。正法眼蔵を書き記している道元の側近くについて、見聞を懷契という直弟子が記録したものだ。その懷契のオブセッションの書ともいう気配もあつて熱心に読んだ。わたしは懷契の問いは、一言でいえば「百尺の竿頭に更に一步を進むべし」という、簡潔なものだったと勝手に解釈した。

アルジャナの問いはどうだったのだろう。絶え間のない、行き着く果てのない殺戮にひるんだとき、クリシユナは「更に一步」を進めろという。この一步は理性の一步先ということだろうか。

ここには自分で解決できない要請があり、解くことができなかった。解くことができないということは、オブセッションを真つ直ぐに生きるといふことの他ではない。

中年期を過ぎた頃だろうか、ある本を読んでいたら、百尺の竿頭から一步進めたら当然地面に落下すると至極当たり前のように書いてあつた。驚いた。これはコロンブスの卵だと思つた。

十に到れば、一に還るだけだ、という理念が心に刺さつた。この「一」には何があるのだろうか。半年ほど前から数人の人に氣功を勧められた。具体的な導きではなく、どうも氣功というものが身体に良いらしい、というか、あなたにはもう氣功しかないのではないか、という忠告だった。

なるほどと思つたが、しかしどう始めたらいいかわからなかった。

予想に反して最近は何調がいい。かかりつけの診療所の先生が「へんだね。太極拳をやつてゐるからかな？」と半分冗談で言つた。そういえば三十年近くうまずたゆまず太極拳を続けているのを思い出した。あまりに日常生活と一体化して、健康法とかそういう目的を忘れていた。そこがすでに氣功的なものになつていたのかもしれない。

太極拳も見方によればスポーツだが、剥ぎ落としていえば最後に氣功的なものが残る。居合いには「初発刀」という技がある。最初の一本目だ。一本目には極意が集積されていると聞いたことがある。わたしの太極拳のクラブでは四方拝を取り入れた「周回式」という技を執拗に鍛錬している。起勢から野馬分鬚の初式を四回繰り返す。すると四方周回になる。この技ができればすべてができると考えている。一を始めるということだ。剥ぎ落として一を選択するので氣功的なエッセンスに出合ふこともできる。

最近出合つた本に『水中の哲学者』があつた。読書会の中に「対話」という視点を持ち込むのが新鮮だった。問いから始まる哲学というのが方法論だが、問いの世代的な特徴を挙げているのが面白かつた。小学生は「なぜひとは生きてゐるか!」「死んだらどうなるか」。高学年は「本

当の友だちとは何か」。大学生は「責任とは何か」。社会人は「なぜ人間関係はつらいのか」。

成長するにしたがつて問いが小さくなる。正しく考えるとは小さな問いに絞り込むということだから正しいことだ。大きな問いには解がない。しかしクリシュナは解などいらないというだろう。

この八月の読書会テキストは『すごい物理学入門』だった。たしかにすぎすぎて話がちっとも弾まなかった。小学生の問いへの回答の世界だったのかもしれない。

十を過ぎて、一を始める。ある意味小学生の問いの場所に戻ることかもしれない。本当に大切なことは「一」の中にある。それ以外の場所の問いや答えは、申し訳ないがもうどうでもいい、という気がする。

2023.08.22

(参考)

佐藤裕之訳 『バガヴァッド・ギーター』 角川ソフィア文庫 2022

懐炎 『正法眼蔵随聞記 改版』 岩波文庫 1982

永井玲衣 『水中の哲学者たち』 晶文社 2021

カルロ・ロヴェッリ 『すごい物理学入門』 河出文庫 2020

読書の福音

三砂 慶明

(読書室)

定有堂書店を出発したあとは人生の大先輩、元・大学生協書籍部の林秀雄さんと自宅まで車中の旅。旅のお供は、もちろん本談義。本好き同士が本について話しはじめたら、時間も場所も年齢も、何もかもがたちまち関係なくなる。この時間がたまらなく好きだ。

林さんと話そうと思っていたテーマがある。それはビジネス書についてだ。私が熱中して研究しているジャンルでもあり、日頃、不思議に思っていることを大先輩の林さんにたずねてみたかったのだ。

「私も含めてなんですけど、いわゆる本好きの人の視界にビジネス書って入らないじゃないですか。あれってどうしてだと思えます?」

「それってさ、結局、使う本と楽しむ本との違いじゃないかな。」

「実用書とエンタメの違いってことですか?」

「まあ、そういう見方もあるけど、ジャンルというより

かは、そもそも本人が楽しいかどうかじゃない？ 使う本って理解することが前提になっているから、楽しむ本とは根本的に違うよね」

「たしかに。では一時期からビジネス書で「教養」がトレンドになりましたよね？ あれって何がきっかけだったと思いますか？」

「数年前に新書で売れた本あったじゃない？ アート思考をテーマにした」

「『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか？』ですか？」

「そう。あの本って、ざっくりいうと経営者にこそ教養が必要だったことを言った本でしょ？ あれがその走りじゃないかな」

「そうでしたっけ？」

「たしか、「エリート」は自分が所属しているシステムの受益者だからそれを改変するインセンティブがそもそもない、だからシステムを無批判に受け入れがちになる。でも、先の見えない現代を生きるためにはそうした前提そのものを疑うことが必要で、そのために「アート」や「サイエンス」、もつという本を読むことが必要だって言った本でしょ」

「だからこそその教養ですか」

「そう。だからあの本もきっかけの一つになったんじゃないかなあ」

林さんの言葉に何度もうなづきながら、いい本とは何か、林さんが全国各地の美術館を見てまわるモチベーションはどこから湧いてくるのか、サッカーやスキー、ゲストハウス、食べ歩きなどの話を伺っているうちに、あつという間に自宅についてしまった。

定有堂書店では六人で積み込んだ本棚を、今度は二人で運び上げないといけないので、どれだけ時間がかかるのかと途方にくれていたら、どういう訳か日頃お世話になっている工務店さんが家の前で待っていてくれた。「大変そやなあ。一緒に運んであげよかー」と救いの手をさしのべてくれたのだ。まさしく神の手だ。不思議なことに困っていると、いつも目の前に誰かが現れる。差し出された手は温かく、この恩を一生忘れないでいたいと思う。

がらんどうの部屋に本棚運びこむとそれだけで空気が一変した。本棚の中に本を並べていなくても、しんとした空気の中で、本棚が何かを語りかけているような気がする。一体何を語ろうとしているのだろう。本棚は奈良敏行さんが新大阪木工に頼んだ特注品で、四十三年間にわたって定有堂書店を支え続けてきた定有堂書店の魂そのものだ。魂には魂で応えなければならぬ。しかし、私はどうした

ら魂に込められるのだろう。

私が「読書室」をはじめようと思ったきっかけは二つある。そもそも妻が「私たちが大事にしているのは、本でもあるけどむしろそれを読むこと、つまり読書だよ」と折にふれて話していたこと。もう一つは奈良さんが「音信不通」第四十九号に書いた「読書のピオトープ」という言葉だった。そこには、私自身考えたこともなかった、「本」より「読書」が上位概念という啓示があったのだ。

私はそれまでただの本好きで、本屋で働いていただけだったのだが、奈良さんの言葉を読み、私の真ん中にあるのは、「本屋」ではなく、「本」でもなく、やっぱり「読書」なんだということに気づかされた。同時に今まで本屋で働きながら感じていた違和が何だったのかも、この時はつきり理解できた。私は「読書」を生業にすることはできないかもしれないが、私が私である限り、一生読書を続けることはできると確信できたのだ。もし私が自分の小さな一生を何かに捧げるとしたら、それは読書以外にありえない。ありがたいことに、奈良さんは私が読書室をはじめたいと相談したときに、その指針となるべき文章も授けてくださった。そこにはこう記されている。

本は「驚き」によって世界（存在）を開く、それは環境

緊縛性から世界開示性への開かれてもあり、ときにそれが「自由」の体験であり、また「救い」でもある。

私にとって奈良さんの言葉はまぎれもなく「読書の福音」に他ならない。そして、奈良さんが示してくれた「驚き」が世界を開くという原理は、読書に限った話ではない。林さんが全国各地の美術館をめぐり続けるのも、きつと同じことなのだ。私にとって、それがたまたま読書だったという偶然に感謝を捧げたい。

追伸 台風のため延期していた「読書室」の読書会を九月五日に実施いたします。ご都合のつく皆様はぜひご参加くださいませ。

「読書室」の読書会

日時…九月五日午後七時～八時半ごろ

場所…定有堂書店二階

課題本…『小さな声、光る棚 新刊書店「little」の日常』（幻冬舎）

副読本…『書店風雲録』『菊地君の本屋』『今泉棚』とリプロの時代』

参加条件…課題本を読んでくださる方

定員…十名 お申し込み：<https://info.dokushoshitsu.com>

「地球沸騰の時代」の夏休み日記

岩田 直樹（公立鳥取環境大学特任教授

「読む会」選書人

小学生の夏休み宿題日記のようで恥ずかしいのだが、あまりに暑くてどこにも出かけられなかった今夏の「心につりゆくよしなしごと」を「つれづれなるままに、そこはかとなく」記そうと思う。（アクティブに動き回った昨夏の日記は拙稿「今月読んだ本」第二三五・二二六回参照）

七月二七日、国連事務総長の言葉が世界中を駆け巡った。世界気象機関の発表「七月は観測史上最も暑い月となった」を受け、「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代 the era of global boiling の時代が来た」と語ったのである。「地球沸騰の時代」はトレンドワードとなった。

この言葉を聴いて即座に、昨年一月七日、COP二七（気候変動枠組条約第二七回締結国会議）でのグテーレスの発言「私たちは、気候変動地獄へと向かう高速道路を、アクセルを踏んだまま走っている We are on a highway to climate hell with our foot on the accelerator.」を思い出した。そのときは「気候変動地獄」という表現に驚いたものだが、今回の「地球沸騰」は輪をかけてインパクトが強い。スピーチライター（おそらくいるだろう）の技量

の高さに感服するとともに、もはや事態はそこまで悪化していることを痛感する。

「処暑の候」である今日八月二四日（本稿締切前日）、
「目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」
秋の訪れは微塵も感じられない。昨夜のNHKローカルニュースは「年間猛暑日数三〇は鳥取での観測史上タイ記録」、全国ニュースは「札幌の最高気温三六、三度は当地の観測史上最高記録」を報じていた。（札幌の知人からは「教室にクーラーなんてあるわけないから、子どもたちはかわいそう。夜も眠れないのでは」とのメール。）

昨日は、最も暑い時間帯に高校野球の決勝戦が行われていた（一四時試合開始）。調べものの合間に慶応・仙台育英戦をネットでチラチラ観戦する。熱中症警戒アラート発令中なのに試合?! たまたま観ていた五回表、外野手が考えられない落球。慶応側の応援が一〇七dB（電車通過時ガード下の騒音レベル）に達し、選手同士の声かけが全く聞こえない状況だったらしい。攻守ミスに対する応援マナー違反も指摘されている。甲子園出場校は一校だけ? と思わせるマスコミの過度な慶応贔屓、さらには、内野・外野席に陣取り、アルプススタンドで懸命に応援する在校生の真摯な思いに配慮できない一部関係者。もうすぐ一万円札（持てる者＝富の象徴）の顔を引退する福沢諭吉先生はどう

思っただろうか。一〇七年ぶり優勝は最大級の「アッパレ！」だ。後味を悪くしたのは取り巻きの大人たちだった。

決勝戦といえは、ハンカチ王子とマー君の延長一五回引分け試合を生観戦したことがある。二〇〇六年八月二〇日（日）、息子と二緒に始発列車に乗り甲子園球場へ。ぎりぎりまで内野席を確保。早稲田実業への応援は「騒音レベル」ではなく、駒大苫小牧の史上二校目三連覇を期待する声援も大きかった。（再試合も観たかったが、勤務校の始業式を休むわけにいかず断念。息子も残念がっていた。）

その夏は確かに暑かったが、耐えられないほどではなかった。この二〇年で甲子園は暑くなっているのか。八月一八日の中日スポーツ・ニュースサイトによると、二〇〇〇年代の猛暑日（神戸）は一〇年間で二五日。二〇一〇年代になると四二日。二〇二〇年代は記事前日まで二〇日。八月のこの時期、全国高校総体など各種全国大会も同様の状況下で開催されている。選手、観客の身に何かが起こる前に、高校野球を含めた開催形態について、スポーツ庁あたりが主導して根本的に検討してほしいものだ。

二〇〇〇年代に入って、柄谷行人をフォローしていない。今年四月、柄谷は哲学のノーベル賞「バーグルエン哲学・文化賞」を受賞した。猛暑の七・八月、集大成『力と交換様式』（岩波書店二〇二二年）、そして、その境位に達す

るまでの『トランスクリティーク・カントとマルクス』
（原著二〇〇一年、岩波現代文庫二〇一〇年）、『世界史の構造』（原著二〇一〇年、岩波現代文庫二〇一五年）、『哲学の起源』（岩波書店二〇二二年）などを原著刊行順に読み続けていた。

柄谷の思想には、なぜか宇沢弘文を想起させるものがある。「資本ⅡネーションⅡ国家」への対抗運動NAM（二〇〇〇～二〇〇二年）の顛末を収録した『ニュー・アソーシエーションニスト宣言』（作品社二〇二二年）を何気なく読んでいると、次の一節が目にとまった。「日本には、この意味で（西欧の協同組合論、自治的な相互扶助を研究して実践的な思想を見出そうとした、という意味で―岩田注）、柳田の農政学を受けついでいる者はいません。ただ、本人がそう思っていないにもかかわらず、柳田と似たようなことをやっている学者がいます。宇沢弘文（一九二八―二〇一四）です。」（一三〇頁）

民俗学以前の柳田国男の農政学については、川田稔『柳田国男―知と社会構想の全貌』（ちくま新書二〇一六年）が詳しい。なるほど、そうか。柄谷・柳田・宇沢の思想的連環が存在するのか。「あやしうこそものぐるほしけれ」という気分になってきた。頭の中が熱くなりワクワクするのは大歓迎だ。

ただ、一度きり

木元 健二（新聞記者）

自宅アパートの非常階段に躍り出た。最上階の八階まで、とんとん駆けあがる。

八月最初の土曜の夜。穴道湖に花火が打ち上げられる「松江水郷祭」が開かれた。乾いた発射音が響き始め、夏の夜空に引き寄せられたのだ。

ただ、高所恐怖症のかなしき。鉄柵があっても、心はひるんだままだ。隙間の向こうの地面に目をやらぬことを徹底しつつ、口を半開きにして空を眺める。

くれない、ブルー、薄緑。それに橙に紫の光芒だ。打ち上がるたび、異彩を放つ円形がふくらみ、光の粒が流れゆく。空の色や風向きに左右され、同じ光景は決して再生できない。だから、余計に手もゆらぎ、スマホで追っても、うまい具合に写真を撮れない。一万発が咲いたというが、隣人にお見せしたくなるようなカッツは残せなかった。

一度きり。

そう感じる状況には、何とも心揺さぶられるものだ。わがウオーキングのお供「アマゾンミュージック」も、そん

な演出をしてくることがある。近頃、思うように再生する曲を選ばなくなったことと関わりがある。

例えば「洋楽ロック」といったプレイリストに入っても、曲順はシャッフルされてしまい、リストの好きな曲を指定して聴くことができない。むろん、追加料金を払えば自由に選べるのだが。

最初はいらついたが、やはりこのままでいい、と思い直した。流れてくる曲が、ふとした弾みで追憶を引き出してくれるから、である。

私の五十三歳という年代から、それは決まって懐メロの類。英語も不勉強な来し方ゆえ、洋楽だと、分かるのはせいぜいタイトルぐらい。なのに、ぐっときて、かつて聴いた頃の心持ちがよみがえる一曲がある。かつての自分とぼったり「再会」するようで、なんだか得をしたような気分に分れるのである。

子どもの頃からビートルズが大好きで、ポール・マッカートニーの拝みたくなるようなシーンを見た。何年前か、昔ビートルズ初公演もあった日本武道館でのステージにて、である。

途中ギター一本の姿で、たった一人、登場しなおしたポール。すつくと立ち、左利きの構えからおもむろに、あの

陰りを帯びたメロディーが響いてくる。

「イエスタデイ……」

レコード時代から何千回と聴いてきた曲の、「今この瞬間」をとらえようと、私は両耳の穴を開ききった。あのたった二、三分の恍惚は、一度きりのライブならではのものであろう。

千両役者。古い言葉の鮮やかな意味を、英リパブル出身のレジエンドに教えられた思いだった。

鳥取県岩美町で「岩井窯」を営む山本教行さんにお話を伺ったのは、もう十六年前になる。

十六歳で民藝の思想を広めた吉田璋也と出会い、十八歳でかのバーナード・リーチと会い、陶芸家を志した。半世紀余り前、山間の地に岩井窯を開いた。知る人ぞ知る、陶芸家である。

山本さんの信念として、人物コラムにこんなことを書いた。

〈同じものがふたつとできない陶器だからこそ、魂を込め、作らねばならない。それでこそ、使い手が慈しんでくれる〉
とりわけ、子どもの感受性を育むのに、壊れないモノだけを使わせてはいけない、というお考えだった。だから、あちこちで出会う幼い子どもにそれぞれの名を記した茶碗

を贈っているのだ、と。

〈焼き物は、たやすく壊れる。そんなはかなさをはらむ器を用いて、形あるものの終わりを知り、やさしきや思いやりの心が育まれたら、と願う〉

山本さんに茶碗をいただいたちびっ子たちも、多くが大人になっているだろう。コスバ、タイパという余地のない尺度に囲まれつつも、大切なことをどこかに宿しているに違いない。

「もし一日だけ、人生のどこかに戻れるとしたら、あの夏の午後がいい。」

キリン「午後の紅茶」のCMから、そんなつぶやきが聞こえてきた。海の家縁側で涼しげな面ざしの女性が伝える、青春の追憶である。

八月も終わりに近づいてきた。例年なら、暮れゆく鳥取砂丘では風に秋色がまじり、並ぶ漁り火がさぞや趣深いことだろう。花火とはまた違った、日本海の情景である。

でも、今夏はまだ、そんな空気にはほど遠い酷暑。

それでもこんな夏の午後も、いつか誰かの、青春の一頁になるだろう。ただ、一度きりの季節として。

まだまだ日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

真夏。あまりにも暑いので誰も歩いていない。誰も歩いていないので誰も店に入っていない。近所のひととの挨拶が「あつついねえ」から「まだまだあついねえ」になった。「まだまだ」に少しの希望をたくしている。もうすこししたら涼しい季節がやってくる。でも暑いので誰も歩いていない。当然本も売れない。

地域の夏まつりが開催されるという。三年ぶり。「夏まつり」という単語に慣れない息子はなぜか「つくえはあるの?」と心配している。どうやら保育園の夏まつりと混同しているらしい。保育園の夏まつりには机がいるのか。夏には夏まつりがいろんなところでやっているとことすら新鮮な五歳児。

「三年ぶりの」と頭につくイベントが多い。町内では地蔵盆や運動会の準備がすすんでいる。大人たちは「前はど

うしてたかなあ」とぼんやり話し合って何とかする。中断していた三年間よりもそれ以前の何十年の蓄積のほうがあるかに大きい。子どもたちにとっては「三年ぶり」と言えば「はじめての」とほとんど同じ意味になる。ひとつふたつ上のお兄さんやお姉さんが経験しなかったイベントが突然やってくる。遠足、お泊まり保育、修学旅行、それから夏まつり。

やらないという選択肢もある。まだやめといった方が、という意見もある。まだって便利な言葉だと思う。まだ、今はちよつと。いつかわからんけど。確かに感染症はこわい。それに対して、どっかの国のえらい人がいいよって言ったから、ではあまりにも考えが浅い気がする。簡単にやらないを選ぶよりは、どうすればちよつとでも安全にできるのかを考えるのが大人の仕事ではないのか。よくわからないウイルスに振り回され、子どもたちに三年間いろんなことを我慢させて、その結果が「まだちよつと…」と言い続けるだけでいいのだろうか。

日雇いのアルバイトで祭の手伝いというのがあった。いの町のすみっこにある神社に集められた数人が、祭つぽい装束を着せられる。本殿に上がると「今から息をしてはいけません」と言われ真つ暗になる。電気がつくくと神輿

が用意されている。ゾロゾロと神輿や長い棒や木箱を担いで歩き出す。なにか掛け声があるわけでもなく、とくに見物の人がいるわけでもない。わりと狭い山道を登ってついたのは空き地なのか公園なのか微妙な空間だった。端っこにうんていと鉄棒がある。それによじ登るように指示される。衣装を着ているので上がりにくい。登ったところで見渡すと山の上の空き地にしては結構な数の人がいてみんなこちらを見上げている。下から餅を渡される。これを撒けという。撒くといっても人はすぐ下にいて、こちらほうんていに登っただけなのでほとんど手渡しに近い。遠くで参加しづらそうにしている子どもやお年寄りにも投げる。餅がなくなるとあつという間に人はいなくなる。神社に戻ると給料と紅白の餅を手渡され帰った。あれはなんの祭だったのだろうか。

鴨川の土手でKさんと缶ビールを開けている。右も左も外国の人ばかりだ。隙間があればカップルは等間隔にとか言ってもらえるのだがぎゅうぎゅう詰めでそれどころではない。五、六人の集団がびっしりと連なりはしゃいでいる。日本語は全く聞こえてこない。喧騒の中でKさんの声を一生懸命聞こうとしている。早口なのでよくわからない。どうやらぼくが悩み相談をしていることになっているよう

だった。「貸したものはね、帰ってこないと思ってるんですぼくは」と急にはつきりとKさんが言った。「十万くらいいもらったほうがいいんとちやいますか」とも言った。それぐらい働いているという意味らしい。褒められている。だが現実には十万くらいいもらったほうがいい仕事をタダでやっているのだ。褒められて喜んでいる場合ではない。

また、オフィスビルの四階の廊下でスーツを着た人と話す。半年くらい前から同じ話しかしていない。「毎月の十万くらいの出費なんですけど、これなんとか言い訳できませんかねえ」と言われている。言い訳できたらどうなんだ。十万返ってくるなら一生懸命言い訳を考えるが、言い訳したところで一円にもならない。「まあ今はまだアレなんで…まだまだこれからですね。頑張りますよ」とよくわからない励ましをもらって帰る。まだまだこれかららしい。一体いつまで続くのかわからない「まだまだ」と、売れるかわからない雑誌の束を抱えて帰る。開店時間はもうちょっとすぎている。

「開風社 待賢ブックセンター」

京都市上京区大宮通樫木町上る菱屋町818

本を作る側から (6)

村瀬 謙介

(小取舎)

私が子供の頃の六〇代七〇代は見た目も中身もおじいちゃんおばあちゃんだった。村瀬家の祖父や祖母は七〇前後でどちらも入れ歯だったし、母方の祖母は畑仕事に出る人で腰が曲がっていた。それから時は経ち、私が中年になったこの三〇年の間に、世界は長寿化が進み、高齢化社会と言われ続けている。今の六〇代、七〇代は当時の祖父母よりはるかに若々しい。さらにいうと、小取舎で取引のある八〇代の方も、原稿に使う写真のデータや打ち合わせ日程を決める連絡をLINEで行うし、ついにはインスタグラムまで始めた。

小取舎を創業当時から支えてくれている七〇歳前後の先輩方も本当に活発で、自分の親くらい歳は離れているのだが、仕事の先輩というか、いいお兄ちゃんという感じで若々しい。むしろ、小学校の三者面談で「村瀬君はおじいちゃんみたい」と担任に言われた私の方が活発ではないかもし

れない。しかし、年を重ねる度に若くなっていく傾向は感覚的にあった。実際、同窓会などに出ると周りの同級生の多くが仕事や育児に疲れ果て流行にも疎く、おじいさんおばさんに見えた。自分は様々な最新な情報を取り込むことが好きだった気質もあるが、若いうちから仕事でも趣味のDJでも若い世代と絡んできたからかもしれない。子供が生まれて急にZ世代と関わることになったオロオロする同級生と違い、グラデーショナルに各世代を知っていると、今の子供たちがなぜそういう考えなのかわかりやすい。学校の先生なんか特にそうなのかもしれない。

消齢化という新しい言葉がある。一九八一年に設立した博報堂のシンクタンク「生活総合研究所」が、生活者の意識や好み・価値観などについての調査を一九九二年から開始し、三〇年という長期的なスパンのデータから今年発見した「年齢による違いが小さくなる現象」のこと。「年齢」と「意識・価値観」が結びつかない時代になっているという。調査を開始した一九九二年には年代ごとの回答の差が大きかったが、年々その差は縮まり、年代ごとの回答の差は小さくなっている。例えばハンバーグが好きかどうか

という問いや、いくつになっても恋愛がしたいという問いにも世代間で差がなくなっている。将来に備えて貯蓄するタイプの数を調べた結果と、将来に備えるよりも現在をエンジョイするタイプの数を調べた結果も対局のようであるが、同じく年代の差が少なくなっている。考えればそうだが、貯蓄するタイプの高齢者が減り、先行き不安な世の中だから貯蓄する若者は増える。今を楽しみたい高齢者が増え、お金を使って今を楽しみたい若者は減っている。だから総合的に消齢化ということになり同じ結果になる。多くの原因は三つあるという。まず、「できるが増えた」こと。生活インフラの充実や長寿化により、気力・体力の面でできることが増えた。二つ目に「すべきが減った」こと。家族観、結婚観（ドラマ『逃げるが恥だが役に立つ』はまさに時代を反映したドラマだった）、仕事観が変化し、社会からすべきという固定観念が減った。三つ目に「したいが重なった」こと。生き方の選択肢が広がり、年相当という言葉に縛られることなく自分の「したい」を追及できるようになった結果、他の年代と「したい」が重なっていった。

コンプライアンスからの流れも原因の一つだろう。コンプラという言葉が広まり、炎上やマスメディアによる制裁

を恐れ、下手ができない・叩かれることをしなくなった。おかしいと思ったことを誰も言えるようになってきた。良い面もあるが（責任なく言えるというのが厄介なのだが）、このことは趣味が細分化している社会にも関連していると思う。叩く人の少ないニッチでギークな安息の地は、情報を求めなくともオーバーコンテンツとなった今好きだけ探すことができる。コンプライアンスが生み出したものは制約だけではなく反骨精神であるように思う。ただ九〇年代の若者が起こしたような大きな波はなく、小さなカウンターカルチャーが連続して起こっているように思う。それも年齢関係なく。

要は多くの人々が似たような課題に対峙し、似たような選択肢を迫られることが影響している可能性がある一方で、全ての領域や文脈でこの傾向が当てはまるわけではなく、依然として世代間には個別の違いや特性が存在する。「消齢化」と小さなオルタナティブの世界の先には何が待っているのか。

『消齢化社会 年齢による違いが消えていく！生き方、社会、ビジネスの未来予測』（集英社）

汽水のほとりから (30)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

『80年代』という雑誌があつたのを御存知だろうか。恥ずかしながら、僕は最近まで全く知らなかった。それを教えてくれたのは、昨年から書肆汽水空港を会場に始めた『氣流の鳴る音』読書会の参加者の一人である某TV局のディレクターKさんである。『氣流の鳴る音』は社会学者見田宗介が真木悠介の名義で発表した作品だが、佐藤健二『真木悠介の誕生』(弘文堂)によれば、見田にとっての真木とは「大学闘争の場で提起された根源的な問題への、応答責任を果たすために生み出された主体」であり、ただのペンネームではない。見田がその真木名義で創刊時から編集委員を務めていたのが『80年代』だった。ちなみに、Kさんはその当時、大学の見田ゼミで学んだ人でもある。

雑誌『80年代』は、その名の通り、一九八〇年一月に創刊号が出て、一九九〇年二月に47号をもって終刊した。当初、題名を『野草』『コミュニケーション』とする案も出され、

僕は野草が一番好きだったと創刊号で真木は書いている。版元は設立されたばかりの野草社という小さな出版社で、前者はそれにちなんだ名前でもあるが、後者については、その会社設立の発起人であつた社長の石垣雅設、思想家の津村喬、宗教家の矢追日聖をはじめ、関係者にコミュニケーションの実践や研究を試みている人が多かったことに由来する名前であり、この雑誌の思想性がストリートに出ている。

創刊号ではまた、『80年代』という題名にこそ寄せて真木はこう述べている。「西暦の年号などはもちろんひとつのフィクションだけれど、紀元二〇〇〇年という千年に一度の区切りのなかに、この二千年をそこで総括してのりこえてゆくすてきなイメージを結晶してゆくこともできる。ぼくたちはこの「二〇〇〇年」を、世界中のあたらしい生き方や感じ方を獲得した人間たちの踊りの環によつて祝われる紀元祭の年として設定しておこうと思う。あたらしいと書いたけれども、それは反対に、人類の最も古い土俗の感覚の蘇生であるようなものもあるだろう。(中略)(80年代)はこのような祭りの準備の時代になるだろう。そして準備が祭りのためにあるよりも以上に、祭りは準備のためにあるのだ」と。なんと希望に満ちた時代だろう！

あれから半世紀近い歳月が流れ、真木が想い描いた未来は現実のものとならなかったことを僕たちは知っている。

が、だからといって、これを一笑に付してかまわないのか。僕たちはむしろ希望を抱くときえ叶わなくなつた現在を振り返り、どうしてこうなつてしまつたのかを真面目に問わなければなるまい。希望に満ちていたあの当時の未来と絶望的な未来としての現在との分岐点が80年代以降にあったことを、その原因とともに考えてみるべきなのだ。

ところで、雑誌『80年代』に掲載された真木の文章はこれまで古本で読むしかすべがなかったのだが、今年三月に新刊『うつくしい道をしずかに歩く 真木悠介小品集』（河出書房新社）が出され、創刊号から12号までの文章は全て簡単に読むことが出来るようになった。しかもそれに加え、同書には二〇〇一年時点で真木自身が80年代を振り返って語っているくだりが見える記事「生命の火種」も収録されている。これも単行本未収録の珍しいもので、一読、なるほどそう考えていたのかと思える内容だった。

真木は言う。「ぼくは、一九八〇年代は大きくいうとぼくたちの負けだったという気がします。つまりぼくらは一九七九年ごろから雑誌を出して、一九八〇年代はこういう時代にするんだというイメージをもっていた。（中略）『80年代』という雑誌名だったんですけど、しかし、世間ではそうではなかった。ぼくたちの負けだった。それが長靴で歩けない、ジーンパンでは歩きにくい、一九八〇年代になつ

たということだと思ふんですね。ぼくたちの作ろうとした「八〇年代」と、日本のバブル経済の「八〇年代」があった。世間でいえばバブル的な八〇年代の方が断然メジャーだった。ぼくたちは基本的にマイナーだったんですね」と。

右の記事で「長靴で歩けない、ジーンパンでは歩きにくい、一九八〇年代になつた」とあるのは、都会を中心に、当時の大衆文化が自然や土俗的なものを排除していったことを象徴的に述べたものだ。真木は同じ記事の最後に人間の思想は大きく分けて《離陸の思想》と《着陸の思想》とがあり、こうした自然を排除する生き方は《離陸の思想》で、逆に、例えば山尾三省が屋久島で暮らしてきた生き方は《着陸の思想》だと語っている。雑誌『80年代』の核にあったコミュニケーションの実践と研究は《着陸の思想》であり、それは今なお経済優先の資本主義社会に負け続けている。

雑誌『80年代』は原発反対の記事を毎号掲載しており、別冊特集号まで出していた。こうした反原発運動の実践と研究も《着陸の思想》であろう。が、これもまた原発事故を経てなお大衆の支持を得られないまま負け続けている。

人民食堂の夜（中）

萩原 俊郎

（倉吉市在住者）

大阪ニチニチの記者、松ちゃんに案内された「人民食堂」は、何のことはない、府庁の職員食堂のことだった。

府庁舎は大正十五年に完成、食堂は「大正モダン」の空気が漂う石造りで、この古めかしい食堂を仕切り、「その兄ちゃん、列に並んでんか」「はい、ネギおまけ」と大阪弁でにぎやかに立ち働くオバハンたちの姿は、なるほど「かつての中国の人民食堂もかくや」と思わせる活気と喧騒だが、さらに松ちゃんの話聞いて驚いた。

◇

◇

◇

「夜はここ『人民酒場』になりまんねん。夕方5時を過ぎたら、ビールや日本酒が飲める格安酒場に化けまっせ」。この大阪府庁に漂う「ユルさ」はいったい何なのだ。

府政記者室の電話が鳴った。「松ちゃん、おるか。頼みたいことがあるんけど」「あの、松尾記者のことでしょ

うか」「松尾？ そんな名前やったかな。知らんがな。とにかく松ちゃんや」「失礼ですが、どちら様で……」「副知事のカジワラや。もうええわ」。ガチャン。

いささか鳥取県庁とは勝手が違う。そして、松ちゃんは府庁ではなかなかの「顔」らしい。「わては府庁という海を泳ぎ回るダボハゼですわ」とは本人の弁。

◇

◇

◇

買収した夕刊「大阪ニチニチ」を朝刊化するにあたり、困った問題があった。残っていた夕刊の記者らは（上）で書いたように「オモロイ読み物」は書いても、いわゆる「5W1H」の簡潔明瞭、ある意味「面白くもなんともない」朝刊スタイルの記事は苦手だった。

五〇代と思われる関西大新聞学科卒の松ちゃんや、同じ新聞学科卒でマル暴（暴力団）担当として鳴らした若野記者らベテラン組も同様で、鳥取から来た私たちが夜遅くまで残って、彼らに記事の書き方を教えた。

「あんたら、『民主主義を教えたる』とやって来た戦後のGHQみたいやな」。占領（買収）した側とされた側。面白くないのか、若野記者がぼやいたが、「汚い雑居部屋に暮らす進駐軍がどこにおりまんねん」。こちらが下手な大阪弁で返すと、「せやな、あんたらも大変や」。大笑いになって、われわれの垣根はやがて消えた。

今や行きつけになった人民酒場で、松ちゃんから「若野記者は『西成暴動』の原因をつくった伝説の男なんやで」と教えてもらった。西成区のドヤ街の労務者たちがたびたび起こした暴動のことで、「西成警察署と暴力団の癒着を暴いた記事に、怒った労務者たちが署を包囲。署長が土下座して謝った」というのだが、何ごとも話を百倍広げる松ちゃんである。「ほんまかいな」とその時は思った。



私たちは朝刊の記事の書き方を教えたが、私の方は、逆に夕刊スタイルの記事や取材に魅了されていた。

原因は松ちゃんとの「人民食堂の夜」にある。松ちゃんはすでに重い糖尿病だったが、毎晩のように人民酒場に付き合ひ、自分では書かないが、あれこれヒントをくれた。

「萩さん、大阪はホームレスだらけやけど、市民と共存している施設が唯一あんな。どこか知ってまっか」。それは市立図書館だという。取材すると、植木鉢に消臭の炭を入れるなど館員らの涙ぐましい努力で「図書館は誰一人排除しない」という鉄則を守っていることが判った。

「USJが来た此花区民は交通渋滞でありがた迷惑、ホントは地下鉄に来て欲しいんや」「関空は豆腐の上に金塊を載せたようなもんで、五十年も持たん、と地質学の先生が言ってまっせ」。いずれも記者室にこもっていては得ら

れないネタだ。面白い「読み物」が次々書けた。

それでも競争相手は朝・毎・読・サンケイの全国紙で、われわれとは圧倒的に取材力の差がある。「どないでつか、太田房江知事との本紙単独インタビューというのは」。松ちゃんは妙案を思いつくと、ものの半月で対談をおぜん立てした。スーパーマンか、松ちゃんは。



元夕刊ならではの型破りな単独インタビューは府庁内でも評判を呼んだ。「知事、いつそ『ナニワの西太后』になられたら、どうですか」「西太后ってメチャクチャな人よ。私がそれやると血圧が上がるわ」。府政記者として「さあ、これから」という時、寝耳に水の人事が下った。

花火大会をやれ、というのだ。大阪二チ二チの買収前にわれわれの社主が招待され、まんまとイッパイ食わされた、いわく付きの淀川の花火大会である。「まさか大阪まで来て花火を打ち上げるとは」。準備にとりかかると、大阪二チ二チがなぜ行き詰まったのか、大阪の夕刊紙がどうして衰退していったのか、少しずつ分かり始めた。

気が付けば秋風

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

あまり知られていないが、七月二十一日から八月二十日は「雑誌愛読月間」であった。

一九九九年から続いているが、今年ほど、この言葉が身に染みたこともない。(前身の「雑誌月間」は七六年の創始である)

この春、「週刊朝日」が百年の歴史を閉じたことは、ニュースで何度も報道されたくらいの大事件であった。

これに限らず、老舗と呼ばれた雑誌が次々に廃刊となっている。口上は「休刊」であるが、復刊の見込みは限りなくゼロだから、実質上の「廃刊」に他ならない。

ここ、二、三年を見ても、

レコード芸術

ザ・テレビジョン

イブニング

近代柔道

ボクシングマガジン

演劇界

セブンティーン

日本カメラ

アサヒカメラ

ミセス

(太字は誌歴五十年以上)

これは、比較的、目にすることの多かった雑誌をピックアップしただけであって、二〇二三年に限っても、既に五十誌を超えているというから只事ではない。

雑誌業界は、秋風を通り越して、秋霜烈日の最中である。

もはや、読者の嗜好が細分化され過ぎて、大部数を期待できる時代ではなく、広告収入は減る一方、毎週毎月、大量の紙を消費することへの忌避感、コンテンツの固定化・貧困化、相次ぐ値上げ…原因は多々あろう。サブスクリプション化は自らの首を絞める行為であった。

(紙で) 生き残るには、会員制か、同人誌化するしかないさそうである。どちらも、狭いジャンルで展開でき、限定部数で採算も確保できる。問題は頒布方法だが、コミケのような大量集客・大量販売方式は、そろそろ限界だろう。

そもそも、地方読者が置いてけ堀である。効率的な通販を考えねばなるまい。

書籍の世界も、極めて厳しい。

ここ十年くらい、じわじわと値上がりしていて、文庫が千円を超え、二千元に迫るのを嘆いていたのが、つい昨日のこのようだが、今月、手にした本を見て、嘘だろ、と思わず声を上げた。

M書房の新作である。

B 6判、ハードカバー、二百ページが、何と五千元であった。ふた昔前の感覚なら、千八百円といった所だ。

翻訳物で、しかも英米独仏ではない、というハンデは理解するものの、五千元ですか、はいそうですか、とは、とても参らぬ。

もうひとつ、S社の新作。

こちらは、B 6ソフトカバー、やはり二百ページ。一応日本人著者による研究書の体裁。俗受けするテーマでない（埋もれた映画人の伝記）ことは重々承知しているが、これが三千元であった。

K談社選書〇チエやT公選書の厚冊で三千超えは既にあるが、四百頁、翻訳物といったことを考えれば、まあ仕方

がない、というレベルであった。

ソフトカバーが三千元ですか。そうですか。

気付いてみれば、ビジネス物やハウ・トゥ物も二千元台がザラ。

かつて、コミックスは、小学生の小遣いでも買えるように、との配慮から、新書判で二百円、三百円台で長く推移してきた。

それも、今や五百円台半ばである。

あまつさえ、あらずもがなのおまけ付き限定版や、過去の名作を豪華装幀に焼き直した特装版、新書、B 6、文庫と散々稼いだ挙句の雑誌初出時完全版、等々の花盛り。なりも振りもあつたものではなく、余程、お内緒が厳しいと見える。

お天気は、秋には程遠い暑さが続くが、生活の方は、忍び寄る秋風の風情には程遠く、いきなり野分と龍巻に、屋根と囲いを持って行かれたような心地がする今日この頃である。

鳥取あれこれ その八十五

内田 克彦（地域研究家）

『三田村鳶魚全集第廿五巻日記（上）』の、大正七（一九一八）年の七月一二日の条に、次の記述がある。

岡山行を見合せ、鳥取に向ひ、立川町広徳寺に入る。

荒木又右衛門に関する取材であつたが、七月二十日の条に、次の記述が載っていた。

広徳寺中に鎌倉七夫婦ノ墓ヲ発見ス。○〔略〕御弓町清水綱吉氏ヲ訪フ、鎌倉七ノ子孫ナリ。

「鎌倉七」とある理由は不明であるが、これは、現在、広徳寺にあつて、日本最古の相撲力士の墓として知られている「鎌倉十七の墓」のことであろう。三田村が「発見ス」と書いているのは、それまで誰も知らなかったということかどうか。

因州藩御抱えの鎌倉十七は、実名は畔柳左茂右衛門であ

り、『因府夜話』や鳥取藩の『家老日記』などにもその名が載っており、御抱えのまま亡くなっている。

三田村は、一九二一（大正一〇）年四月五日発行の『日本及日本人』第八〇六号（臨時増刊）に、「鎌倉十七の時代」のタイトルで一文を発表している（その後、一九二五（大正十五）年刊の『随筆江戸の噂』に収録）。まず、横綱常陸山谷右衛門著で、一九〇九（明治四二）年に刊行された『相撲大鑑』の中に載る『相撲鬼拳』から引用している。

『松平出羽守様前方の関取箕の島権太左衛門、其昔は相州鎌倉十七と名乗次第と相撲能勝人希なり、三百石被下置候、六十余歳に成相撲御免被下、御頭と成、其節明石志賀之助と申関取高の有し日之下開山とは是なり、勝人無し、或時太守様被仰出候は、明石鎌倉と勝負御覽可被遊由にて両人士俵にて勝負有之、六十五歳に成鎌倉勝候、皆々驚事限りなし、其年太守様江戸にて御一同様方仰られしは、御国許にて鎌倉明石相撲の事御聞および被遊候故御望有之〔略〕其時の相撲も明石負になり〔略〕貴殿若き時の相撲にくらぶれば、明石は何程の相撲成るや、鎌倉答て能前相撲也。』〔以下略〕

日本相撲協会が認定する初代横綱である「明石志賀之助」と鎌倉十七とが対戦し、二回とも明石が負けた、との意で、三田村は「松平出羽守様前方の関取箕の島権太左衛門」なる人物については触れずに、『因府夜話』に載る鎌倉十七と明石志賀之助との関係を追及し、「鬼拳の記載は色々な矛盾がある」としている。

ところで、明石志賀之助は実在した人物が長い間疑われて来たが、中村弘著による『日下開山初代横綱明石志賀之助すもうの街宇都宮が生んだ力士』が二〇一二年に発刊され、実在の「決定的根拠」として、出羽国『上山三家見聞日記』の次の記述を掲げている。

〔寛文元辛丑年（一六六一）〕閏八月十五日新山権現二日町八幡の如く御旅祭り有江戸より明石志賀之助と言すもふ取下り此祭り振ふすもふ有山城守殿御見物す

昨年には、宇都宮駅前には石像が建てられ、台座に「監修中村弘」として、次の紹介文が刻まれている。

寛永一六年（一六三九）宇都宮藩主奥平の家臣で

山内主膳の子鹿之助として宇都宮の生まれと伝わる

幼い頃から評判の力持ちで江戸に出て須磨浦親方に弟子

入りし「明石」の四股名をもらい明石志賀之助を名乗る〔略〕

天和二年（一六八二）天下無双の力を発揮し「日下開山」の称号を賜り〔略〕元禄十二年（一六九九）九月に江戸の善照寺（相撲寺）において引退相撲を飾った。

この中村著には、日本相撲協会相撲博物館蔵の『角力鬼拳』からの書下文を載せており、先ほどの『相撲鬼拳』とほぼ同文である。しかしながら、それには「松平出羽守様前方の関取笠端十太左衛門其昔ハ相効鎌倉十七と名乗り」とあって、「コラム」の中で、対戦結果を「そんなことはあるまい」と一蹴していた。鎌倉十七と名乗る、『相撲鬼拳』での「箕の島権太左衛門」、『角力鬼拳』での「笠端十太左衛門」とは誰なのか。

雲州相撲を調べた著作に『松江八百八町内物語 末次町民史』がある。「日下開山箕島十太左衛門」の項を設け、「相州」と御国付を称したのは池田相模守光仲に抱えられた鎌倉十七時代のこと、のち雲州召抱えとなつた時に「箕島」に改めた」とあった。これは事実であろうか。

八代日記

(四十一)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

七月某日

妻がコロナに罹患した。高熱で寝込む。こどもにうつってしまっていたら保育園で撒き散らしてしまいそうで悪いので、会社を休んで家で看病と子守り。家事が楽しい。主夫になりたい。

追って長男も発熱。熱はあるがとても元気。小児科で陽性の診断。熱は一日で下がってしまったが保育園は当面休み。通っている小児科の先生が素敵で自分はとても好きなのだけど、町のお医者さんってのは、ほんとうに地域社会に重要な存在なのだと思頃よく思う。困ったときに立ち寄れる場所。あつて当たり前のだと思わないようにしなければいかん。

続けて自分も発熱。内科にて陽性とわかる。昨年末から二回目の罹患。丸三日高熱で動けず。五日間は会社休んでくださいねと病院で言われる。会社が近頃辛いで休めてうれしすぎる。

喉の症状は全くなかったが頭痛がひどかった。悲しいことにライブの予定を2本も飛ばしてしまふ。音信不通の原稿も間に合いませんでした。申し訳ない。この頃には妻が動けるようになっていた。

最後に次男が陽性。彼も高熱は一日だけで元気いっぱい。全員が社会復帰できるまで二週間くらいかかってしまった。とてもきつかったが、家族の皆で過ごせて僕はうれしかったです。

七月某日

知人より名古屋のちくき文館書店が閉まるとの知らせを受け取る。古田店長は元気だろうかとか、熊本から色々教えを乞いに行った時のことを思い出していたら、知らせをくれた知人が古田さんからのビデオメッセージを送ってくれた。相変わらずでひと安心。そして相変わらずキュートでいらした。五〇年勤め上げたとのこと。これからよろしく、という言葉をいただく。こちらこそよろしくお願ひいたします。

後からネット上のインタビュー記事も読んだ。とても冷静で、しかもなんだか楽しそうに話している気がしたが、気のせいかな。

八月某日

角田波健太波バンドのレコ発ライブに呼んでいただき大阪へ。ひとりで早目に着いて、レコード屋を回ろうと思っていたが、暑すぎて体力が心配になりコメダ珈琲で読書。後藤護『黒人音楽史』中央公論新社。面白すぎる。ウータン聴きたい。

ライブ会場は久しぶりのソーコアファクトリー。久しぶりのムーズムズとも会う。出番は波バンドの前。波バンドはとにかく素晴らしいので、我々ケバブは一曲目からぶちまけた。やり切った感あり。角田さんも刺激を受けてくれたようで波バンドも最高だった。

メンバーだけでしっぽりとお好み焼き居酒屋で食事。お好み焼き研究所って名前だったか。全てのツマミがうまかった。腹を満たして宿へ。着くなり寝る。

八月某日

翌日は名古屋へ移動。角田さんの別バンドであるピラミッドと、シラオカとケバブの3マン。会場のブラジルコーヒーに向かう前にちくき正文館に寄ってみたがシャッターが降りてしまっていて、電話もしてみたが誰も出ず、店長には会えなかった。あの大量の岩波の本は、いったいどうなってしまったのだろうか。

本番。いつものようにピラミッドは素晴らしく、新しいベーシストの演奏が特に良かった。シラオカは初めてだったけどこれまたすごかった。すごいとか良いとかだけでいつもすみません。

ケバブはトリなど務めさせていただき、アンコールも二回もいただいて恐縮至極。名古屋は最近お客さんの反応がよくてうれしい。また来たい。

八月某日

コロナの後、固有名詞を思い出せないことが多い気がするが加齢だけなのかわからない。コロナ、大阪ライブ、名古屋ライブのあと、なんだか疲れてしまって、全く仕事に行きたくない。朝起きてスラックスを履きたくない。なんとまあレコードを聴く元気もない。ライブをするかただ静かに読書だけしたい。黙々と。静かにしていたい。静かにしたいのとライブしたいのは矛盾なのか。明日は神戸でライブだ。神戸の帰り、岡山に寄りたいが、時間はもうどうだろうか。

理想と現実の狭間から

映画『バービー』を観て

三浦 永理

(青翔開智中学教員)

楽しみにしていた映画が悪い話題で、ニュースになっていた。『バービー』だ。アメリカでは、『バービー』と原爆の開発者に関する『オッペンハイマー』が同日公開だったことで、SNS上に『Barbenheimer』という日本人からすれば、笑えない流行語が生まれていた。そこに公式SNSが、キノコ雲とバービーのポスターを組み合わせた趣味の悪いファンアートに返信をしてしまったりしたこと、日本国内での不満が爆発してしまった。

それでも、溢れるばかりのピンクに彩られた、まさかの『バービー人形』が主人公の映画は、大人向け寓話である。

『バービー』で、バービーを演じるのは、金髪の美しいマーゴット・ロビーである。彼女の住むバービーランドには、彼女のような「ステレオタイプ」バービーもいれば、検察官、大統領、様々な役職についているバービーも存在し、その姿は多様だ。その相手役として付属するように誕

生したケンも、この世界に存在する。ケンを演じるのが、ライアン・ゴズリングである。私からすると、ライアン・ゴズリングといえば、ミュージカル映画『ラ・ラ・ランド』のジャズシンガー役だった。あのライアン・ゴズリングが何故、バービーにくっついて生まれただけのケン役を演じるのか？

しかし、この役はもうライアン・ゴズリングしか考えられない。この映画は、バービーだけでなく、ケンのための物語であった。そして、そんなケンはバービーと共に、歌って踊らなければ、相手役にはなり得ない。そんな『バービー』はミュージカルの形式が意識され、ミュージカル映画で成功した彼が相手役を演じるのも無理はない。付属品として生まれたケンは、かつて現実世界で女性たちが、仕事をする機会を与えられず、夫によってでしか存在を認められていなかった時代を反転させるような経験をしている。そして、バービーとケンは現実世界に行くことで、それがバービーランドの特殊な状況だと気づく。現実社会は、バービー人形を作るマテル社を含め、男性優位社会なのだ。(映画の中ではコミカルに強調されており、実際のマテル社には女性役員もいる。)

『バービー』は、映画についての映画でもある。冒頭はあるSF映画のパロディから始まる。数あるミュージカ

ルシーンは、『サタデーナイトフィーバー』や『雨に唄えば』の影響も指摘されている。そして、バービー人形、映画などなど、まさしくポップカルチャーが生み出したジェンダー像の問題、そしてそれをめぐる環境を、滑稽さを交えて伝えている。

ただ、この映画の主題はジェンダーだけなのか？ 改めて、この映画がミュージカルという極めてアメリカ的であり、何よりリアリズムとは逆の形式を意識していることを考えなくてはいけない。作り物ということが前面に出された形式だ。つまり、この映画は、生身の人間が生きる現実と人形が生み出す空想の世界、どちらが美しいのかという問いを立てているのではないか？ ミュージカルのようにあくまで作られた舞台セットのような世界を、理想論の完璧な世界を降りて、どこまで現実を変えうるのか、観客は突きつけられる。

また、『ラ・ラ・ランド』も、『バービー』と同じく古き良きミュージカル映画からの引用がある。ハリウッドの厳しい現実と夢を追求めるノスタルジーを描いた作品だ。ジャズシンガーの男性と女優を目指す女性。背中を押された一瞬とそれ以外にも、各々の人生は進んでいく。

このようなアメリカンドリームを追う人間に対するノスタルジーを描いた初期の作品が、実は一九二五年に描かれた『グレート・ギャツビー』ではないだろうか。

主人公のギャツビーは、典型的なアメリカンドリームを追いかける青年のはずだった。しかし、かつての恋人ディジーを求めて、破滅的な結末を迎える。恋愛小説ではあるが、一方で若き筆者自身のアメリカ文学に名を残そうとする野心が感じられる。彼には、ディジーと出会う前と同じように夢や理想を追うことはできない。メッキが剥がれてしまいそうなきわどい商売を通して作ったお金で、ディジーに近づき、過去を取り戻そうとするだけだ。そのギャツビーの思い人であるディジーは、誰かに付属することでは生きていることのできない上流階級の女性である。

あるバービーが「何も考えなくてよくて楽」と言う。（どのような場面かまでは言及を控えよう。）ディジーは「きれいで、頭の弱い娘」になったらと娘のことを思う。

百年経っても繰り返されるステレオタイプに飽き飽きする観客がいるのも確かで、『バービー』の提示するジェンダー観のある意味での古さも指摘される。それでもこの物語は訴えてくる。理想と現実の狭間で破滅せずに、我々はどうか、と。

トレース（コーヒーゼリー2）

あきの素生

（くうねるめがね）



帰省した。車で必要最低限の休憩だけ取って実家に帰り、家にもつて過ぐして、また必要最低限の休憩のみでこちらに戻ってくるという去年の帰省よりは、少し緩やかに過ごすことができた。

今回一番行きかったのは、通っていた高校の近くの喫茶店だった。その喫茶店は「小高い丘」という表現が似合いの、市内を一望できる住宅地の中にあった。今日は歩きたいなと思った日は、バスに乗って十分ほどの道のりを、ときに友人と一緒に、ときにMDウオークマンで好きな音楽を聴きながら、三十分ぐらいかけて乗り換えのバス停まで連れて歩いて帰る。その途中にある喫茶店だった。かわいらしい一軒家といった風情で、いかにも雰囲気がよくそうだったのだが、チェーン店ではない「一点もの」の喫茶店に入る勇氣は、当時なかった。大人になったら入ってみたいね、と小声で友人と話しながら、喫茶店の前を通り

過ぎるのが常だった。

大人になって、初めてその喫茶店に入った。そのお店では、ムーミンに出てくるリトルミイのような髪型の（あんなに大きなおだんごではなかっただろうけど）とてもチャーミングな店主さんが、それまで見たことがない布袋のような道具を使ってコーヒーを淹れてくれた。憧れていた喫茶店はやっぱり素敵なお店だった、とうれしくなり、それからたまに通うようになった。

最初はコーヒーを飲んでいたが、そのうちサイドメニューも気になりはじめ、特にコーヒーゼリーに興味を惹かれた。何といっても、コーヒーゼリーが大好きだからだ。そのお店のコーヒーゼリーは少し固め、クラッシュされていても存在感があつて、上にたっぷり濃厚なバニラアイスがのっかっていて。コーヒーの味がしっかりとっていて、それがバニラアイスとよく合い、こんなおいしいコーヒーゼリー初めて食べた、と感動したのを覚えている。

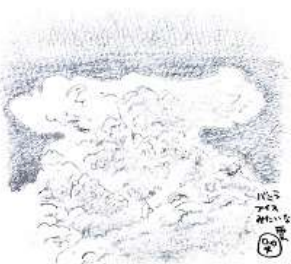
なぜ今回その喫茶店に行きたいと思ったかと言うと、先日初めて行ったカフェでコーヒーゼリーを食べたからだ。初めて入ったカフェや喫茶店では、大抵まず温かいコーヒーを頼む。コーヒーの味がわかるわけではないのだが、

基本の一杯を飲んでみようと思うのだ。ただし、うだるような暑い日に、炎天下を歩いてきた、というときと（迷わずアイスコーヒーを頼む）、コーヒーゼリーがあるときは例外だ。先日のコーヒーゼリーには、ソフトクリームがのっかっていて、コーンフレークが添えられていた。濃いコーヒーの味とソフトクリームの甘さ、カリカリとしたコーンフレークの香ばしきで、すっかりそのカフェが気に入ってしまった。そして、それと同時に、あの懐かしい喫茶店のことを思い出したのだ。

一度ふたが開いた懐かしさは連鎖を起こして、十代、二十代の頃に行った印象深いお店をいくつも調べた。変わらずそこにある店、移転した店、もう見つからない店など様々で、この十数年、立ち止まらずに過ごしてきたことを改めて感じさせた。

インターネットで件の喫茶店が営業日であることを確認し、グーグルマップで経路を設定して、車で向かった。地元では、低い山々の麓に家々がへばりついている。どころか、いつそ山の中腹以上ところに家がつらつらと並んでいる。団地の「だん」は段々の「段」だと思っていたくらい、家は山に建っているものだった。高校と喫茶店は、実

家の団地がある山とは別の山にあるので、峠を越えて行くのが一番の近道だ。何度も通ったはずの峠道をなかなか思い出せないでいたのだが、ナビのおかげで迷うことなく、するすると目的地にたどり着くことができた。のだが、喫茶店は、まさかの休業日だった。残念な気持ちはありつつも、不思議と後悔はなかった。久しぶりに見た母校が、私たちが通っていた頃と何も変わらないように見えた。峠を越え、木々の切れ間から見えた数々の団地、びっしりと並んでいる家々の様子に、一生知り得ないことがあるのだと突き付けられたようで切なさを覚えた子ども時代を思い出した。それだけで、何かが満たされたような気がした。コーヒーゼリーは、次に帰省したとき、食べに行こうと思う。



（イラスト・あきの素生）

期待のニューフェイス



ドラメリア (座敷わらし)

「推し」が引退した、と友人が嘆いていた。デビューのときあんなにキラキラ輝いて見えて、将来有望だと思ったのに、コンサートにも通いつめたのに、と。もう本当にがっかり。そういうことってない？ 友人の嘆きは突如飛び火する。

うーんないかな……というのが正直な答えだった。いわゆる「推し活」はしていない。短いスパンで対象を変えて次々と新しいアイドルグループを応援する友人の毎日は、わたしからすると気忙しい。気持ちいが平坦なほうなので、燃料が枯渇しそうだなあと思ったりする。

そのやりとりから数日して、ふと思い当たることがあった。え、期待の新星のはずだったのに、あんなに会社全体で押しているように見えたのに。気がつけば姿を消している、もう見ることは叶わない。一方向的関係でこちらの思

い入れなど向こうは知る由もないが、でもでもなんだか裏切られた気分。……やはり同じかもしれない。

衣類の柔軟剤だ。仕上がりを柔らかく香り良く、という柔軟剤は、わたしにとってちよつとした贅沢で（何しろなくとも洗浄に問題ないわけで）、さきやかな楽しみでもある。最近の柔軟剤は進化していて、複雑な香りや高機能を謳う商品が次々と出ている。あれこれ試してみたいわたしは、棚の前でじっくり検討して、「よしこれだー」と思うものを手に取る。けれどわたしが選ぶ対象はいつも短命で、そろそろ切らしてしまうから詰め替えを買わなければ、と思ったときにはひっそり棚から姿を消している。あれ？ もうないの？

……だから、わたしはいつだって詰め替えができずに、ニューフェイスを推しつづけている。

・編集後記……

雑貨屋に立ち寄ると、「秋の香り」として銀木犀の香りの小物が。柔らかな香りに惹かれて、アロマオイルを買いました。使うのが楽しみです。

ドラメリア (編集長)

八月一日の、三砂慶明さん主宰の「読書室」読書会は、台風接近のため九月五日に延期。課題本は辻山良雄『小さな声、光る棚 新刊書店「二」の日常』（幻冬舎） 奈良敏行（発行人）